

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：11401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24652098

研究課題名(和文) 複言語・複文化能力理念再構築に関する基礎研究 農業従事者の異質性対応方略と思想

研究課題名(英文) Basic research to reconstruct plurilingual and pluricultural competence concepts: Farmers' strategies and philosophy to accept otherness.

研究代表者

牲川 波都季 (SEGAWA, HAZUKI)

秋田大学・学内共同利用施設等・准教授

研究者番号：30339733

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：日本の外国語教育学では、欧州評議会が提案した複言語・複文化能力という教育目標に関心が高まっている。しかし複数の言語や文化の学びを経験せずとも、それらを対等なものとして寛容に扱う態度や、文化間の交流を仲介者として促しうる能力、他者とともに生きるという能力は獲得できるのではないか。

本研究はこの仮説への答えを明らかにするために、複言語・複文化能力概念を批判的に考察したのち、秋田県仙北市西木町の留学生対象の農家民泊プログラムの参与観察およびインタビュー調査を実施した。これらの調査により、農家民泊運営農家のもつ異質性対応方略と思想的背景の一部を明らかにし、上記の仮説の妥当性を証明することができた。

研究成果の概要(英文)：Foreign language pedagogies have been interested in plurilingual and pluricultural competences which were proposed by European Conference as goals of foreign language education. However, we hypothesized that it is possible people acquire attitudes to treat plural languages and cultures equally, competence to mediate between different cultures and to live with others cooperatively, even if they don't have special opportunities to learn plural languages and cultures.

In this research project, (1)Segawa analyzed concept of plurilingual and pluricultural competence critically, (2)Segawa and Ichishima did fieldwork of farm stay program for international students in Nishiki-cho, Senboku, Akita, (3)Ichishima did follow-up interviewed to participants.

As results of the researches, we showed farmers' communication strategies to accept otherness and some parts of their philosophy as the background of the strategies. Namely, our research project could confirm the hypothesis.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：異質性対応方略 複言語・複文化主義 グリーン・ツーリズム 調整行動 秋田県仙北市西木町 外国語能力

1. 研究開始当初の背景

複言語・複文化能力とは、欧州評議会による言語共通参照枠(2001)で広く認知されるようになった概念であり、その能力をもつとは、一個人が複数の言語や文化を学び経験することで、それらを対等なものとして寛容に扱う態度を身につけ、文化間の交流を促しうる仲介者となって他者とともに生きることができるという状態を指す(p.168)。留学生30万人計画や外国人看護師・介護士受け入れ開始に見られるように、海外からの移住者の積極的受け入れを政策的に推進しつつある日本でもまた、こうした複言語・複文化能力を身につけることの重要性が指摘されはじめ、多様な言語や文化を知るための教育プログラムの開発や、海外とつながりをもつ人々の複言語・複文化能力研究が盛んになりつつある。

ただしこうした研究で想定されている複言語・複文化とは、ある国民・民族にまつわる言語・文化である。この意味での多様な言語や文化を、自律学習や学校外での経験、または学校教育を通じて知り使えるようになることが、複言語・複文化能力を獲得している状態とされる。つまり日本の文脈で言えば日本語・日本文化と、義務化されている英語とそれらにまつわる文化以外の、別の言語・文化を学ぶことが、複言語・複文化能力の育成と位置付けられている。

2. 研究の目的

しかしこうした複言語・複文化能力の定義に全く反する事例が、秋田県仙北市西木町のグリーン・ツーリズム運営農家には見られる。当地でグリーン・ツーリズムを営む農業従事者の多くは、仙北市西木町または周辺の農村地域で生まれ育ち、その地域で生活を送ってきた。言語に関しては英語を学んだ経験はあ

るものの、特別に高度な外国語運用能力をもつというわけではなく、他の国民・民族の文化に関する知識もメディアを通じて得る情報にほぼ限定されていた。

しかし、2009年に研究代表者の企画・運営で開始した留学生対象農家民泊プログラムでは、それが外国人を集団で受け入れた最初の事例であったにも関わらず、本研究申請時点までの3年度にわたる実施において問題が起こったことは一度もなく、農家と留学生双方から、お互いに十分な交流ができ満足したという成果を得ている(秋田地域留学生等交流推進会議2009,2010,2011)。この結果から、研究代表者は、複数の言語や文化の学びを経験せずとも、それらを対等なものとして寛容に扱う態度や、文化間の交流を仲介者として促しうる能力、他者とともに生きるという能力は十分に獲得できるという仮説を得た。この仮説の検証が本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 現行理論の批判的検討

上記の仮説を検証するために、本研究ではまず、研究代表者である牲川が、専門的知見をもつ研究者1名(細川英雄氏、専門:日本語教育学、当時早稲田大学名誉教授)に、複言語・複文化主義の現在の理論的達成について聞き取り調査を行い、それを踏まえて、関連する代表的な文献(Coste, D., Moore, D., & Zarate, G. 1997, Council of Europe 2001, Council of Europe 2007)を批判的に考察し、理論上の限界についての指摘を行った。

(2) 参与観察

次に、牲川が連携研究者である高村竜平氏(専門:農村社会学、秋田大学准教授)から、西木町の地域的歴史的特性、フィールドでの参与観察で留意すべき点を確認した上で、牲川と研究分担者の市嶋で西木町で行われた

留学生対象プログラムに参加した。そして、1軒の農家での、農業従事者と留学生との会話記録をすべて録音しながら参与観察を行った。

得られたデータは、複言語・複文化に接する機会の限定された農業従事者は、いかに言語や生活を異とする他者と意思疎通を図るのかという観点から、主に市嶋により接触場面における談話分析の手法を用いて考察された。

(3) フォローアップ・インタビュー

農業従事者の参与観察の結果を踏まえ、市嶋が、プログラム参加留学生3名に対し、農業従事者の対応に感じた事、参加したことへの感想などに関するインタビュー調査を行った。

(4) 考察結果の統合

(1)から(3)の研究から得られた考察結果を統合し、仮説を検証するとともに、農業従事者のもつ異質性対応方略としてまとめた。

4. 研究成果

(1) 現行理論の批判的検討の成果

牲川(2013, 論文)において、現在の複言語・複文化主義は、すべての人間が複言語・複文化能力を有しているとしながらも、それを教育対象として強調しており、そのことが特定言語を実体化・階層化させるだけでなく、その教育を受けうる者と受けえない者の階層化も促しうると指摘した。その上で、異言語・異文化への接触経験が少ない人々の中に、複言語・複文化能力を見出すことの意義を主張した。本研究課題の意義を理論的に支えうる成果である。

(2) 参与観察, (3) フォローアップ・イ

ンタビュー, (4) 分析結果の統合

まず牲川(2013, 図書)として、参与観察の結果の一部を、農業従事者の異質性対応方略集として公開した。次に、市嶋・牲川(2013, 学会発表)および市嶋(2013, 論文)において、農家民泊プログラムでの農業従事者・留学生・引率者の接触場面での相互行為を、調整行動という視点から分析した。分析は、教育場面での相互行為分析を専門とする市嶋が主に行なった。

分析の結果、農業体験活動中の調整行動として、母語話者による「農業体験の文脈, 物, 言葉の関連付け」, 「易しい言葉への言い換え」, 「エピソード, 物, 言葉の関連付け」, 「身近な話題の提供」, 「話題への感銘」, 非母語話者による「話題の修正」, 「話題の提供」が抽出された。また、農業体験活動中、母語話者と非母語話者という境界性を感じさせない対等な関係性に基づく環境が構築されていたことが明らかになり、このような言語活動空間の形成を可能にしたのは、農業従事者に底流する、農業への誇り、非権威的な人間観、他者に対する不断の興味、これら人生観が留学生との接触場面に影響を与えていたためであることも主張した。

同時に牲川は、農家民泊プログラム事業が留学生にもたらす意義を、これまでの事業5年間の振り返りとして集約した(牲川2014, 論文)。また成果の一部を反映させる形で、大学における日本語教育は、経済至上主義に資する人材を育成するため知識や技能を教えるのではなく、ナショナリズムや経済至上主義に対抗しうる世界市民の育成をめざし、価値観の教育を行うことが重要であるという発表を行った(牲川2014, 学会発表)。

以上の研究成果から、複数の言語や文化の学びを経験せずとも、それらを対等なものとして寛容に扱う態度や、文化間の交流を仲介者として促しうる能力、他者とともに生きる

という能力は十分に獲得できるという仮説の妥当性を明らかにしえた。

また、具体事例に基づき、自らにとって異質な他者に対し、具体的にどのような方略、調整行動を用いたらよいかを示したほか、それを支える思想（人生観）とは何かの一端を示すことができた。

今後はこうした異質性対応の背景となる思想をより詳細に析出するとともに、なぜ秋田県仙北市でこうした対応能力と思想が育まれえたのかについて、農業従事者一人ひとりの異質性との出会いの歴史、そして仙北市の地域史とから、立体的に解明していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

牲川波都季 (2013). 誰が複言語・複文化能力をもつのか『言語文化教育研究』11, 134-149 .
<http://gbkk.jpn.org/vol11.html#segawa>
査読有り

市嶋典子 (2014). 農業従事者と留学生の接触場面に関する一考察 農業体験活動における調整行動に注目して『秋田大学国際交流センター紀要』3, 1-13 .
<http://hdl.handle.net/10295/2370>
査読有り

牲川波都季 (2014). 農家民泊5年間 秋田県仙北市西木町にて『秋田大学国際交流センター紀要』3, 53-82 .
<http://hdl.handle.net/10295/2373>
査読無し

[学会発表](計2件)

市嶋典子, 牲川波都季 (2013年11月16日) 『接触場面におけるカテゴリー生成と変化のプロセス 母語話者と非母語話者の調整行動に注目して』日本語教育学会研究集会第8回東北地区(東北大学, 宮城県仙台市).

Segawa, H., 13 June, 2014, Ideological problems of JSL education in Japanese universities: Will we devote ourselves to

economic supremacy or to cultivation of alternative values?, ISLS 2014 Opening session: Language education in Japan: Current state, challenges, and future directions, International Society for Language Studies, 2014 Conference, Akita International University, Akita, Akita.

[図書](計1件)

牲川波都季 (2013). 『農家に学ぶ留学生受入の思想と方法 秋田県仙北市西木町のグリーン・ツーリズム事例集』

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牲川 波都季 (SEGAWA, Hazuki)
秋田大学・国際交流センター・准教授
研究者番号: 30339733

(2) 研究分担者

市嶋 典子 (ICHISHIMA, Noriko)
秋田大学・国際交流センター・講師
研究者番号: 90530585

(3) 連携研究者

高村 竜平 (TAKAMURA, Ryohei)
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号: 30425128